

宝暦、明和年間の朝鮮通信使

—十八世紀後期朝鮮士大夫の世界観—

伍 躍

キーワード：朝鮮通信使・友好交流・対外認識・小中華論

明和年間に来日した通信使について、これまでたくさんの研究成果が公表されている⁽¹⁾。

十八世紀中期以降、東アジアの三カ国はそれぞれ慢性的な内政問題を抱えながらも、国の安定を保っていた。まず中国では、雍正帝の統治を継承した乾隆帝が長期政権を維持し、清朝支配の盛代を迎えた。朝鮮では、英祖 [1725-1776] から正祖 [1777-1800] まで、七十余年間にわたって、体制的動揺が見られなかった。日本でも、十八世紀前半に行われた新井白石、八代将軍吉宗の改革の成果として、幕府は行政財政管理機構の強化により支配権力を強く確保していた。この三カ国の国内安定によって、当時東アジアの国際環境は引き続き安定的秩序を維持し続けることができた。第十二回朝鮮通信使一行はこうした国際環境のなかで、江戸まで行った最後の通信使団として来日した。この時

期の通信使の派遣は、対中国外交のカードとしての意味もすでに薄くなっており、単なる慣例に従う行事になってしまっていた。

こうした国際環境のなかで来日した第十二回通信使に対する研究は、主に以下の点に注目が集められている。第一は、これまでの通信使と同じように行われた文化交流についての研究である。この点において、李元植氏は包括的な研究成果を公表している⁽²⁾。また当時朝鮮通信使一行と親しい関係を持つ那波魯堂の五世孫である那波利貞氏も、先祖と朝鮮知識人との交流についての研究論文を発表している⁽³⁾。第二は、当時の来日した朝鮮人の日本観と日本人の朝鮮観についての研究である。この問題について、三宅英利氏は自著『近世日朝関係史の研究』の中で論じているほか、近年「朝鮮王朝後期官民の日本観」を発表し、朝鮮の日本観は「蛮夷観」と「友好観」の融和する矛盾の構造である、と指摘している⁽⁴⁾。

ところが、これまでの研究は、日本の知識人と一般民衆による朝鮮文化に対する強い追求を

(1)「宝暦度朝鮮通信使主要著書・論文目録」、辛秀基・仲尾宏『大系・朝鮮通信使』、第七巻、甲申・宝暦度、東京、明石書店、1994年、271-272頁)

李元植「宝暦度・筆談唱和および遺墨関係資料」、前掲書、116-119頁

(2)李元植「明和度(一七六四)の朝鮮国信使一成大中との筆談・唱酬詩巻を中心に一」、『朝鮮学報』、第84輯、

1977年、67-113頁

(3)那波利貞「明和元年の朝鮮国修好通信使団の渡来と我国の学者文人との翰墨上に於ける応酬唱和の一例に就きて」(『朝鮮学報』、第42輯、1967年、1-48頁)

(4)三宅英利『近世日朝関係史の研究』、東京、文献出版、1987年、552-555頁

同氏「朝鮮王朝後期官民の日本観」、荒野泰典ほか

論じているが、こうした両国の学者の間の文化交流は朝鮮国内の知識人にとって、どのような影響を与えていたか、さらに当時の朝鮮知識人は日本文化の発展に対し、如何なる認識を持っていたか、などの問題にはあまり触れられていなかった。これは日朝両国間の認識問題だけではなく、おそらく当時の朝鮮知識人の東アジア全体に対する認識の問題である。本稿では、全体の問題をひとまず避けて、第十二通信使団の正使趙曦の日記『海槎日記』と燕行使の随員として北京に行った柳得恭の『並世集』を基づいて、当時における双方の文化交流の具体像と朝鮮国内知識人の日本認識を説明したい⁽⁵⁾。

一

明和元年〔1764、朝鮮英祖三十八年〕、徳川家治襲職を祝うために来日する通信使一行の人選をめぐって、以前と同じような方針をとった。つまり、日本で最も関心を集められる製述官と書記官は文化水準の高い者を選任することである。製述官の職には、南玉を任命した。南玉は、宜寧の人で、字は時韞、号は秋月である。1722年に生まれ、1753年に庭試に登った。一方、書

『アジアのなかの日本史V・自意識と相互理解』、東京、東京大学出版会、1993年、175-204頁

(5)この二つの史料について、簡単に説明しておこう。

『海槎日記』は、第十二回通信使団正使趙曦の使行日記である。この日記には成大中の序文をはじめ、日記、酬唱録、各処書契、与彼人往復文字、筵話、祭文、日供、三使一行録、路程記などが収められている。その「日記」の部分は、朝鮮英祖三十九年〔1763年、日本宝暦十三年〕八月三日から、英祖四十年〔1764年、日本明和元年〕七月八日までほぼ一年間の使行記録である。その中に、彼自身の感想も含まれている。1914年の活字本（『海行摠載』、第四冊、朝鮮京城、朝鮮古書刊行会、131-489頁）、1994年の景印本（『大系・朝鮮通信使』、第七巻、甲申・宝暦度、123-163頁）がある。

『並世集』は、柳得恭の著作である。柳氏は、1790年と1801年、二回わたって、北京に行って、『四庫全

書』の編纂をしていた紀昀をはじめ、中国の知識人との交流を広く行った。彼は「北学派」の一員として、清代の中国文化に対し、客観的な認識を持っていた。この本は、中国、日本、安南（ベトナム）、琉球など知識人、官僚の詩を収める書物である。入手容易なものでは1962年の景印本である（『燕行録選集』、上、ソウル、成均館大学校大東文化研究院、1962年、615-650頁）。

記官の職には、成大中、元重挙を任命した。成大中は、昌寧の人で、字は士執、号は青城である。彼の祖先はかつて大臣クラスの参判を務めたこともある。彼は1732年に生まれ、少年時代に有名な学者金焄に『易経』を学んで、1753年に司馬に就任し、1756年に文科に中った。元重挙は、安東の人で、字は士才、号は玄川で、詩で知られる人物である。

通信正使趙曦は、重要なポストを歴任し、「能言人所難言」、すなわち人の言い難いところを言える者⁽⁶⁾、対日交渉の実務経験も持つ官僚であった。彼は、朝鮮英祖三十三年〔1757、日本宝暦七年〕に東萊府使を務めた時に、日本人に人参を密売した倭館の訳官に対し、厳しく処罰した⁽⁷⁾。また同三十六年〔1760、日本宝暦十年〕に、彼は慶尚道監司として、密売を取り締まる法律を実施した⁽⁸⁾。

宝暦十三年〔1763、朝鮮英祖三十九年〕八月三日、趙曦を正使とする通信使一行は、英祖を辞し、王城を出発した。同月二十二に釜山に到着し、ここではほぼ一ヶ月あまりに停留した。そして十月六日夜明けの前に、一行は釜山で六隻の船に分乗して出港し、同日夕方にそれぞれ対馬の佐須浦に着いた。それからさらに三ヶ月を

書』の編纂をしていた紀昀をはじめ、中国の知識人との交流を広く行った。彼は「北学派」の一員として、清代の中国文化に対し、客観的な認識を持っていた。この本は、中国、日本、安南（ベトナム）、琉球など知識人、官僚の詩を収める書物である。入手容易なものでは1962年の景印本である（『燕行録選集』、上、ソウル、成均館大学校大東文化研究院、1962年、615-650頁）。

(6)『英祖大王実録』巻82、英祖三十年十月乙亥条、『朝鮮王朝実録』第四十三巻、英祖実録三、ソウル、国史編纂委員会、1986年、544頁

(7)『備辺司啓録』、第134冊、英祖三十四年戊寅六月二十五日

(8)『備辺司啓録』、第139冊、英祖三十六年庚辰十二月初一日

かけて、瀬戸内海を経て、宝暦十四年（明和元年）一月二十日ようやく大阪に到着した。

さらに一月二十六日に、一行は日本側の用意した舟に乗り換えて、淀川を遡って再び出発した。翌二十七日、淀で舟を降り上陸し、陸路をとって、西京（京都）、彦根、大垣、名古屋、浜松、三島、小田原を経て、二月十六日に江戸に入った。

一連の国政に係わる公式行事を終えてから、通信使たちは三月十一日に江戸を離れて、京都を経由して、四月五日に大阪に着いた。しかし、四月七日夜、都訓導崔天宗が大阪客館で対馬島伝語官鈴木伝蔵に殺害されることによって、通信使一行の帰国する予定が大幅に遅れた。この事件の処理が終わって、一行はようやく五月八日に大阪港で乗船し、六月二十二日に釜山に帰着した。

宝暦、明和年間の通信使は、これまでのなかで最も不幸な通信使と言えるだろう。まず、先に述べた例を見ない崔天宗の被殺、同志間の傷害など、さまざまなことが発生した。次に、公式行事をめぐる儀礼の問題もあった。二月二十七日、江戸の「伝命」の席で、趙曦は、殿中の床に並べられる朝鮮国王よりの礼単、庭下に繋がれている朝鮮国王よりの贈馬を見て、「羞憤一倍」を感じた。また上に座っている関白（徳川家治）への四拝礼を強要されて、「寒心」した。さらに、関白の前で「空罎」によって飲む真似だけすることには甚だしい屈辱を覚え、その日の日記の中で、「倭皇」と抗礼すべきが、君でも臣でもない関白と抗礼したのは、尤も羞憤すべきことである、と記している⁽⁹⁾。

二

通信使一行の日本滞在中、数多くの日本文人に接して、筆談唱和した。元重挙の話によれば、三、四ヶ月の間に、一千余人の日本文人と揖譲し、二千余篇を唱和したという⁽¹⁰⁾。当時、両国文人の唱和を記録する本が数多く残されており、李元植氏の統計によると、それは三十七種にのぼっている⁽¹¹⁾。こうした筆談唱和は、通信使一行の一ヶ月以上にわたって滞在した大阪でも賑やかに行われていた。以下では、主に大阪で行われた日朝間の文化交流及びそれに対する両国文人の考え方について述べることにする。

宝暦十四年（明和元年）一月二十日、趙曦一行は大阪に到着し、二十六日に江戸に向かって出発するまで大阪に滞在した。滞在中の二十二日、二十三日、二十四日の三日間、日本人は朝鮮の文人に詩、書、画などを求めに次々と会津館に来た。そのなかには、朝鮮人に始めて会った日本の文人木村兼葎堂、那波魯堂などがいた。成大中が来日した際に書いた日記「榎上記」のなかに、その記事が記されている。

二十二日、甲戌、晴。文士十四人來見。木世肅、福尚修、合離、那波師曾、富野義胤其選也⁽¹²⁾。

翌二十三日、鳥山崧岳も客館に来て、南玉、成大中、元重挙、金仁謙に歓迎の詩を贈呈した。二日後の二十五日に、鳥山崧岳は再び客館に来た⁽¹³⁾。

彼らは、那波師曾を除いて、いずれも兼葎堂会のメンバーである。木村兼葎堂と福原承明は、

(9) 趙曦『海榎日記』、日記・『海行摺載』本、254-260頁

(10) 那波利貞・注(3)前掲論文

(11) 李元植・注(1)前掲論文

(12) 成大中「榎上記」・注(1)前掲書、187頁

(13) 鳥山崧岳『垂葎詩稿』（野間光辰『浪華混沌詩社集』、般庵野間光辰先生華甲記念会、1969年、近世文芸叢刊、第八巻）、32頁、64-65頁

通信使一行十五名の氏名、雅号を彫った印章を贈った。たとえば、木村蒹葭堂が成大中に贈った印章では、「昌山成大中士執印」、「允執其中」、「浪華木弘恭刻」などと記されている。福原承明が彫った印章の印文は、「成氏士執」、「日本浪華福尚修為東華龍淵成君刻」とある⁽¹⁴⁾。木村蒹葭堂は、「蒹葭雅集図」と題する一幅の山水画を描き、片山北海、細合半斎、竺常らの題跋を添え、成大中に贈った。

成大中が木村蒹葭堂について、那波師曾に尋ねたのは、おそらくこの後の出来事であった⁽¹⁵⁾。

成大中：木世肅何如人而以好事稱耶。

那波師曾：敝邦幅湊四達之地，除江戸京師無踰大阪城。其富商素封，却以大阪城為第一。蓋以清人賣斥雜貨，從長崎達大阪。其他四方經商買賣，亦必通大阪也。世肅最是多資。其人年少不好煙花，不喜驕傲，却以買書募畫為事。更斲古器物，一年費不下百兩。在他人頗重，在世肅自輕。其清虛之心，又惹得士人騷夫，儘自風流。

那波師曾の紹介によると、わが国の交通の便利なところは、江戸、京師（京都）を除いて、大阪より便利なところがない。ところが、富商の多いところと言えば、大阪が一番である。中国商人が販売した商品は、長崎より大阪に運んで来る。他の商人はあちこち商売して、きっと大阪を経由する。世肅は、資産のもっとも多い者である。その人は、年少で煙花を好まず、驕傲も嫌う。彼は、本と絵の収蔵に専念し、古器物も好きである。一年間にこのために使った金は百兩以上にのぼる。これは、他人にとっては重いものであるが、彼にとっては軽いものである。彼の清虚心は、文人の間で高い評価を受け

る。とても風流な人物である、とある。

以後、木村蒹葭堂のことが朝鮮で広く紹介されたのは、おそらくこのことがきっかけである、と思われる。

通信使一行の帰途にあたって、大阪で崔天宗被害の事件が発生したので、事件処理をめぐって、双方の交渉は一時緊張した。事件を処理した後、明和元年五月初六日、通信使一行は再び帰国の旅に就く。大阪の文人たちは、客館に送別しに来た。成大中の日記に、次の記録が残されている。

初六日、丁巳。暁、雨注。……過午、出館、別石屏老人陶国興。其姪三宅斌及安井属玉別於門外。木弘恭、合離、片猷、竺常、浄王侍於路側、下馬握手而別。那波師曾及弟奥田元繼待之船⁽¹⁶⁾。

一行が出発した後、大阪の文人たちはまた送別の詩を送った。例えば、出発三日後の九日、強い風の影響で、一行は室津で停留したところ、木村蒹葭堂、福尚修、竺常からの詩札、墨をもらった。六月十八日に、対馬の芳浦で、成大中は那波師曾、竺常、木村蒹葭堂、合離、福尚修、富野義胤らあてに、感謝の手紙を書いた。

例えば、成大中より竺常（梅莊頭常、大典、蕉中などとも称す）あての手紙の中で、次の言葉を記している。

僕入貴境以來、接韻士文儒多矣。而於筑州得龜井魯、於長門得滝彌八、於備前州得井潛、於攝津州得木弘恭、福尚修、合離、於平安得那波師曾、於尾張州得源雲、岡田宜生、源正卿、於江戸得波井平、木貞貫、而最後得蕉中師⁽¹⁷⁾。

これとは別に、朝鮮通信使一行は帰国する途

(14)「日本人所刻成大中印章・李元植氏藏」・注(1)前掲書、83頁

(15)那波利貞・注(3)前掲論文

(16)成大中「槎上記」・注(1)前掲書、191頁

(17)梅莊頭常「萍遇録」・注(2)前掲論文より

中、長門で滝長愷と面会した。その席で、滝氏は、今回の行程で、大阪、江戸および各地の藻客髦士、芸を抱き接見を求める者は多いが、才学風流を語られる者は何人いるか、と聞いた。秋月は、大阪の木弘恭の風流、細合半斎の才華、平安的那波師曾の博学、竺常の雅意、尾張州源正卿の偉才、岡田直生の詞律を挙げて、私たちがともに傾倒すべき者であると述べた⁽¹⁸⁾。

通信使一行が帰国した後の七月八日、朝鮮国王に復命するとき、趙曦は、秋月、成大中、元重挙、金仁謙四人はそれぞれ約千余首の詩を作った、と報告した。国王はさらに、成大中は如何であったか、と質問した。これに対し、趙曦は、非常に優秀であった、と答えた⁽¹⁹⁾。国王は続いて成大中に接見した。その席で、国王は、幾首を唱和したか、と聞いた。成大中は、千首に近い、と答えた。国王は、どこでの唱和が多かったか、と聞いた。成大中は、大阪、西京（京都）、尾張州（名古屋）、江戸で、この四ヶ所はいずれも大都会であり、特に大阪で一時五、六十人が同時に唱和を求めた、と答えた。彼の答を聞いて、国王は非常に満足そうであった⁽²⁰⁾。

三

こうした日朝両国文人の間に盛んに行われていた交流に対し、当時の双方はどのように評価していたのか、これは両国の交流史、相互の認識史上の重要な問題である。

当時の朝鮮では、伝統的学問は、依然として政府によって認められ、支配的地位を持つ「正学」である朱子学であった。朝鮮側はずっと昔から、日本に対し一種の文化的優越感を持っていた。日本の場合、数多くの日本人が朝鮮文人

の詩画などを求めに来たことは、さらにこの文化的優越感を強めさせた。忙しく対応しているなかで、来日する朝鮮の知識人は、表面的なものをとどまらず、より冷静に日本文化を観察する時間もなくなった。

当時、実学思想の発展は、なお初期的段階であったが、朝鮮の官僚層の中にはあまり影響はなかった。通信正使趙曦の日記から、こうした朱子学の影響と対日優越感を伺うことができる。

通信使一行が朝鮮国王に復命するとき、国王より、秋月が彼ら（日本人）の詩を持ち帰ったか、との発問に対し、秋月は、日本人は先に詩を作り、次にわたくしは唱和し、故に彼らの詩を持ち帰ったと答えた。この時に、趙曦は、日本人の書いた詩は円成の篇（いい作品）がほとんどないので、御覧すべきものがない、と説明した。さらに、朝鮮国王は、彼ら（日本人）は朝鮮人の文武の才に及びがたいと言ったか、と聞いた。やはり趙曦は、御言葉の通りである、と返事した⁽²¹⁾。

実は、日本だけではなく、中国に対しても同じであった。宝暦十三年十一月初六日、一行は対馬の府中で、対馬島島主が主催する宴会の席で、日本側の「軍官員役」は、宴会場の隣の部屋で自分たちの席を設けた。宴会が始まって、この「軍官員役」は、ただちに食べ物を求めに来た。宴会場は一時混乱した。趙曦は、燕行使は北京に行く時に中国政府が主催する宴会の席にこのようなこともあったことを思い出して、「胡倭二国、記綱漸益墜落、つまり満州人支配の中国（胡）と日本（倭）は、ともに国家としての制度がしだいに崩壊に向かっている、と感嘆した⁽²²⁾。

帰国直前の明和元年六月十八日、通信使一行

(18)『長門癸甲問槎』・注(2)前掲論文より

(19)趙曦『海槎日記』、筵話・『海行摠載』本、463-464頁

(20)成大中「槎上記」・注(1)前掲書、195頁

(21)趙曦『海槎日記』、筵話・『海行摠載』本、463頁

は対馬で島主の招待を受けた。この日の長い日記のなかで、趙曦は滞在中に接した日本文人を評価した。たとえば、那波魯堂は、「聞識」のもっとも多い人である。木村葦葢堂の詩文は、「無足称」、つまりほめるべき者ではない。菽生徂徠については、文章は他の学者を越えても、著書『論語徴』の中に朱子の注釈を「偽註」としている。とにかく、日本の学術は、いまなお長夜の状態が続いており、すなわち何の明るいこともないと言ってもよい、と彼は考えた。さらに、趙曦は、中国の毛奇齡は、陽明学を宣伝して、朱子の理論を攻撃することを含めて、次の結論を書いた。

陽明之術汜濫天下、而朱子之学獨行於朝鮮。

群陰剥盡之餘、一脈扶陽之責、豈不專在於吾東多士焉⁽²²⁾。

つまり、王陽明の理論は天下に汎濫し、朱子学はわが朝鮮にしかない。「群陰」（中国と日本の知識人）によって破壊された朱子学を復興するのは、わが朝鮮知識人の責任である。

これは、おそらく当時朝鮮知識人の代表的見方であり、十七世紀の「倭乱」と「胡乱」のあと、朝鮮の知識人はこれから朝鮮を中華文明の担当・継承者と自負する「小中華」論、つまり中華思想の朝鮮版に基づく対外認識である。本来は、中国は中心、あるいは中華である。中国のまわり、東には東夷、西には西戎、南には南蛮、北には北狄があり、いずれも野蛮の民族である。東夷のなかに朝鮮、日本、琉球などがある。ところが、その「小中華」論によれば、中国、中華とは、地理上の概念というより、むしろ一種文化上の概念である。満州人支配の中国は朱子学を捨てたことによって、その文化的中心地位も失って、ただの「胡」になってしまっ

た。「胡」という言葉は、北方野蛮民族（北狄）の一つを指すものであった。趙曦にとって、満州人は、北方からやってきた人間で、朱子学も提唱せず、まさに「胡」にあたるべきものである。したがって、昔の中華はすでに「胡」になったので、これから朱子学の復興、つまり文化を復興する責任は、わが朝鮮の知識人が担っているというわけであった。

四

しかし、十八世紀の後半の朝鮮で、思想上の新しい変化が始まった。英祖の時代に入って、伝統の儒教に対し、批判の声が次第に高まった。その中で、もっと社会の実際状況に役に立てようとする新しい知識人の代表として実学派が登場してきた。その代表人物は李徳懋、柳得恭らであった⁽²⁴⁾。

李徳懋 [1741-1793] は、李氏朝鮮後期の実学者の「北学派」の代表人物である。字は懋官、雅亭と号す。正祖の知遇をうけて、奎章閣檢書になった。かつて、燕行使の随員として、北京に行つて、中国の文人と親しく交遊していた。彼の著作「蜻蛉国志」は、李氏朝鮮後期において、もっとも水準の高い日本観の代表作である。従来朝鮮知識人の日本文化蔑視観を批判し、日本の学者を「海外傑士」と称している。彼は、日本に来たことがなく、日本に関する知識の入手経路はなお不明であるが、しかし、明和元年に書記官として来日した成大中は、彼の「莫逆之友」、つまり最も親しい友人であるので、彼の日本観の形成にとって、多少の影響があると考えられる。

柳得恭 [1749-?] は、李氏朝鮮後期の学者

(22) 趙曦『海槎日記』、日記・『海行摺載』本、170頁
(23) 趙曦『海槎日記』、日記・『海行摺載』本、326-331頁

(24) 姜在彦『朝鮮近代の变革運動』、東京、明石書店、1996年、15-18頁

である。字は恵風、恵甫で、号は冷斎、冷庵、古芸堂である。彼は李徳懋、朴齊家、徐理修とともに、正祖の拔擢を受け、奎章閣檢書に登用された。1790年と1801年、燕行使の随員として、二回にわたって中国に行った。北京での滞在中、彼は当時中国の最も有名な文人に接した。例えば、『四庫全書』の編纂で名を知られる紀昀、目録学の専門家黄丕烈などである。彼は、「実学」の北学派に属し、民生問題は生産の発展によって解決する、そのために中国の長所を学びながらも、北京で西洋人宣教師を招き西洋の長所も学ぶべきだ、と主張した。

文学、特に詩に対して、柳得恭は、詩は中国に求めなければならない、そうではないとまるで鱸魚を求めたいのにその産地の松江に行かないと同じような行為だ、と指摘した。彼は、中国の漢詩を何も知らず自ら満足すれば、一生、鱸魚と橘の味を知らないと同じだ、と語った。彼は、中国明代の文学に対する朝鮮知識人の認識を取り上げた。「明の一代に、四傑七子竟陵雲間の名声は海内を震動させるほど高まった。しかし、朝鮮では何も知らなかった。数年以後、彼らの文集は朝鮮に伝われることによって、朝鮮知識人はようやくいつにどこでだれが活躍したのかを知り始めた」とある。彼は、かつて朝鮮の知識人が軽視した中国清朝の文学作品の紹介を行った。『国朝詩別裁集』のほか、自らも十八世紀末期の中国で流行している詩から最も代表的なものを選択し、『並世集』二巻を編纂した。この本の中に、当時の朝鮮で「倭」と賤視する日本の漢詩の一部も含まれている⁽²⁵⁾。

通信使団の書記官を務めた成大中は、木村蒹葭堂から贈られた「蒹葭雅集図」を持ち帰って、

「莫逆之友」李徳懋に見せた。その際、李徳懋は、「朝鮮の俗は狭陋にして忌諱多く、文明の化は久しいといえども風流文雅は日本に遜色あり」と、絶賛の余り嘆いたほどである⁽²⁶⁾。柳得恭は、この「蒹葭雅集図」に対し、筆意の濃淡は中国絵画史の著しい成果を得た元代画家に学ぶものと評価した。

柳得恭は木村蒹葭堂の「題蒹葭堂雅集圖」を収録したうえ、この題記も書いている。

木弘恭 字世肅、浪華人。世肅構蒹葭堂於浪華之渚、貯圖史。與越後片猶、字孝秩、平安那波斯曾、字孝卿、合離、字麗玉、浪華福常修、字承明、岡元鳳、字公翼、葛張、字子琴、淡海僧竺常、伊勢僧浄王相唱酬。甲申通信時、成龍淵舟過浪華、世肅見之托契、臨別寫「蒹葭堂雅集圖」以贈之。筆意淡淹學元人⁽²⁷⁾。

柳得恭が収録した日本詩人の詩は、ほとんど元重挙に贈ったもので、恐らく元重挙が自ら持ち帰ったものであろう。これまでの研究は、おもに成大中に贈呈した作品および那波魯堂と朝鮮文人との唱和を紹介したものであり⁽²⁸⁾、元重挙に贈呈したものは、あまり紹介されていなかった。柳得恭は中国文人の詩を収録するとともに、日本文人が元重挙に贈った詩も収録したことから、通信使たちが持ち帰った日本文人の詩は朝鮮文人の間に広く紹介され、そして高く評価されたことを窺うことができる。さらに、朝鮮知識人の内部には、日本に対する認識の差がある、ということも読み取れるだろう。

五

次に、日本側の朝鮮認識について紹介したい。

(25) 柳得恭『並世集序』・『燕行録選集』本、615頁

(26) 李元植・注(1)前掲論文

(27) 柳得恭『並世集』、巻2・『燕行録選集』本、647頁

(28) 那波利貞・注(3)前掲論文
李元植・注(2)前掲論文

当時、日本の知識人は、特に関西京都、大阪の知識人は、積極的に通信使との文化交流を行う一方、冷静な見方もあった。

那波魯堂（師曾）の弟の奥田元継は、通信使一行に対し、次のような評価を書いた。

余詳案朝鮮人作為文章、因不為韓柳歐蘇、又不為李王。實有方土習俗、而一守其師承、不復少變矣。固陋之甚、閱古今筆話可知也。今茲甲申聘使同行四百八十有餘人、其中筆翰如流、語言成立、間有奇妙可評者、唯秋月一人而已。龍淵猶可謂具品也、其他則元金二書記。良醫醫員之屬、雖稍構短辭作筆語、然遲澁鈍拙、為秋月龍淵之下遠矣⁽²⁹⁾。

これによると、朝鮮人は文章を書くときに、韓愈、柳宗元、歐陽修、蘇軾、李夢陽、王世貞など中国文豪のものを学ぶより、自分の先生のもを学んで、少しでも変わっていない。今回来日している四百八十余人のなかに、「言語が成り立つ、たまに奇妙な文章のできる者」は、秋月が第一、成大中が第二、その次が元重挙、金仁謙である。

上田秋成は、秋月（南玉）、龍淵（成大中）という二人の他は下郎じゃ。ただ物をほしがる事じゃ、と痛烈に指摘している⁽³⁰⁾。

このほかに、代表的な意見としては、よく引用される中井積善の『草茅危言』がある。

韓使は文事を主張する故、随分文才に秀でたるを選みさしこすと見えたり。故に道路客館にて皇国の儒臣と詩文贈答筆談の事多し。此方の儒臣多き中に文才の長ぜぬもありて、我国の出色とならぬもまま見えて残念なり。夫はさて置、又三都にては平人までも手寄せへあれば館中に入り贈答するに、官禁も無けれ

ば、浮華の徒先を争て出る事なり。館中雑沓して市の如く、疎文悪詩を以て韓客に冒觸し、その甚敷は一向未熟の輩、百日も前より七律一首やうやう荷ひ出し、それを懐中し、膝行頓首してさし出し、一篇の和韻を得て終身の榮として人に誇るなど笑ぶべし。かかる事なれば、韓客は諸人を蔑視し、数十篇の詩を前に積置、筆に任せて是を和するに、その中に声律ちがひ、韻のちがひたるやうの詩あれば、墨を附て投出し返すを、広坐の内よりにじり出で拾い取り懐中して退くなど見苦しき事限りなかるべし。又韓人の和詩を書するに、文鎮の代りに脚を投出し踵にて紙を押へるなど狼藉至極の事なるを、有がたがりて頂戴するもあり。いづれも我邦の大恥、寔に苦々敷事也。愚は宝暦の聘使の時、客館に行きしに唱和の始まりてある席を通りかかり、右の様子は目のあたり目撃せり。苟も志気ある者、誰かこの輩と伍をして贈答に出べきや。故にまれまれ正学真才の人ありと、是を愧て初より韓人とは声息をたちたり。韓人は是を知らず、その接する所は往々右の如くなれば、渠をして日本に人無しなどと謂はさんことは寔に歎ずべき事也⁽³¹⁾。

中井積善 [1730-1804] は、「大阪第一の大儒で」、当時、西日本一の文化教育の中心——懐徳堂の学主である。字は子慶、号は竹山、別号は同関子、晩年の号は渌翁であった。彼の指導によって、懐徳堂は、経術、文章を学問の両翼としてともに重視し、全盛の時代を迎えた。彼自身も幅広い分野を研究し、荻生徂徠の『論語徴』を批判する『非徴』八卷、二十七年をかけて書いた徳川家康の伝記『逸史』十三卷、経世

(29) 那波利貞・注(3)前掲論文

(30) 上田秋成「胆大小心録」61、『日本古典文学大系』、第五十六冊、上田秋成集、東京、岩波書店、1959年、

289頁

(31) 早川純三郎『通航一覽』、巻111、東京、国書刊行会、1913年、319-320頁

論としての『草茅危言』五巻など、もっとも有名な著書を書いた。学問以外に、彼も詩を好んで、交遊もよくした。明和二年に誕生した混沌詩社にも加わった。

朝鮮知識人との交流そのものに対し、中井積善は反対していない。当時、彼は弟子を集めて、詩文贈答の予備演習を行った⁽³²⁾。しかし、一部の朝鮮知識人の文化的優越感と日本文化蔑視観に対し、上述した老中松平定雄への建議『草茅危言』のなかに強い不満を表明したと同時に、「疎文悪詩」を持って、交流の席に臨む日本の「浮華の徒」を禁ずるべきと提言した。

六

実は、当時（十八世紀後半）の大阪は、西日本随一の経済中心地だけではなく、文化の面でもすこぶる発展を果たした。町人の町と謂われる大阪は、江戸と京都に続いて、独特な漢学を形成していた。つまり江戸の武家文化、京都の公卿文化と異なる町人の財力で創られた町人の漢学である。懐徳堂の誕生は、こうした背景の出来事であった。当時大阪文化の特徴としては、統治支配、あるいは政治闘争の実用に資する学問ではなく、人間として対等の立場で交流するための一種の教養で、一言で言えば、実用の学問である⁽³³⁾。その漢学が収められた成果の一つは漢詩である。

漢詩は大阪での発展は、十七世紀以降のことであった⁽³⁴⁾。享保十六年〔1731〕に、林東溟は、経学ばかりを教える懐徳堂と異なって、護園古文辞派の詩文を教えて、『徂徠先生詩文国字牘』、『明詩礎』、『諸体詩則』などを出版した。彼が

大阪を去った後、旧門人たちは次第に菅沼東郭、菅甘谷の門下に帰した。趙曦通信使一行が来日する直前の宝暦年間に、大阪漢詩の発展に大きな影響を与えたことが起きた。宝暦三年〔1753〕頃、宇野明霞の直弟子の片山北海が、大阪に来た。当時十八、九才、後に有名な詩人、博学者として知られる木村兼葭堂は、片山北海の門に入門した。五年以後の宝暦八年に、酒造りを経営する木村兼葭堂は、自らを主宰者とする兼葭堂会を結成して、同年八月に『兼葭堂会稿』を刊行した。当時の参加者は十八人である。たとえば、片山北海、福原承明、岡公翼、葛子琴、細合半斎および木村兼葭堂本人である。これらのことから、大阪漢詩の発展は百年あまりの時間を経て、共同の興味をもつ詩人同志の団体、詩社結成の動きが見られるのである。こうしたことは、明和二年〔1765〕に結成される混沌社と直接に結び付けることができる。

兼葭堂会の会合は、その後も継続された。たとえば、宝暦十三年八月十六日に、兼葭堂会は会合した。その会に出席した亀井南溟は、当時の様子について、片山北海はこの会の牛耳を執るものであったと書いている⁽³⁵⁾。翌宝暦十四年正月十七日、つまり趙曦通信使一行の来阪の三日前に、網島の酒楼で京坂詩人諸家大会は開かれた。大会の主催者は烏山松岳（宝暦六年に来阪し、詩社垂葭館を結成した）である。参加者は二十五人で、片山北海門下の木村兼葭堂ら加わる。京都在住の文人、三十八才の那波魯堂も出席した。

当時大阪の知識人の教養水準について、柳得恭が収録した木村兼葭堂の詩を例をとって見てみよう。

(32) 李元植・注(1)前掲論文

(33) 『大阪の学問と教育』、大阪、毎日放送、1973年、89-94頁

(34) 前掲書、95頁

(35) 『日本の近世』、第十三巻、文学と美術の成熟、東京、中央公論社、1993年、173-176頁

「蒹葭雅集図」の上に、木村蒹葭堂はこの詩を題している⁽³⁶⁾。

「小塘掘江曲 幾處共相羊 投轄常浮白
論文日攤黃 誰知結交地 不屑少年場
盟社知斯在 何愁簡且狂」

この詩は八句四韻によって構成される近体の五言律詩である。四韻は、「羊」、「黄」、「場」、「狂」で、いずれも「陽」字韻である。

さらに、漢詩を作るための欠かせない典故の使用も相当な水準に達している。

まず、第二句の「相羊」は『楚辞・離騷』からの言葉で、つまり、「折若木以拂日兮、聊逍遥以相羊」で、意味は遊ぶである。

次に、第三句の「投轄」であるが、「轄」とは以前の馬車に使われる車輪を車軸に固定するくさびのことである。中国前漢時代の陳遵は、酒が大好きで、いつも賓客を招待する。彼は、賓客を止めようとして、賓客の馬車のくさびを外して井戸の中に投じる。賓客は急用があっても帰られない。諸橋轍次の『大漢和辞典』によれば、「客をねんごろに留める喩」と解釈している⁽³⁷⁾。

第三に、同じく第三句の「浮白」は、中国の古典『説苑・臣術』から出たものである。すなわち酒を飲み残した人を罰するために飲ませる杯を指すものである。この二つの典故は、友人同志がよく集まって酒を飲むことを、生き生き物語っている。

第四に、第六句の「少年場」は、中国の古典『漢書・酷吏伝・尹賞』から出たものである。当時、長安で若者がよく集まる場所を「少年場」と言った。この典故を使ったは、おそらく木村蒹葭堂が自分たちの心の若さを強調したいから

であろう。

以上、ほんの一部だけであるが、木村蒹葭堂が詩のなかで中国の古典をよく使用しているのは、彼の漢学の高い知識水準を裏付けるものである。趙曦は「無足称」と評した木村蒹葭堂の詩文は、決してそうではないのである。

十六世紀以降、朝鮮の朱子学は大きく発展した一方で、中国に対する事大主義に基づく朝鮮版の「華夷論」が硬直していった。たとえば、有名な朱子学者である李退溪は、事大主義の理論基礎として、「名分論」を強調している⁽³⁸⁾。

天無二日、民無二王。春秋大一統者乃天地常經、古今通義也。大明為天下宗主、海隅出日罔不臣服。

つまり、天には二つの日は無く、民衆には二つの王は無い。春秋の大一統は天地の常經であり古今の通義である。(よって)大明は天下の宗主となるが、海隅日出の朝鮮は臣下として服従せねばならないという。

こうした硬直した「華夷論」は、十七世紀の「倭乱」と「胡乱」を経て、「小中華」論に帰して定着した。この「小中華」論、及びそれに基づく対外認識は、朝鮮官僚の中で引き続き支配的な地位を占めていた。具体的には、中国を支配する清に対し、「事大」はただの慣例として継続し、日本に対し、文化の面で極端に賤視していたのである。通信使の派遣に関しては、当代の優秀な才學を持つ学者を選任して送って、日本人と唱酬させ、日本人が文化を崇尚するようになるのであれば、そうした文化崇尚の風気につれ外国侵略の余地がなくなるよう誘導しなければならないという理念に基づく外交活動であ

(36) 柳得恭『並世集』、卷2・『燕行録選集』本、647頁

(37) 諸橋轍次『大漢和辞典』、東京、大修館書店、1959年、第五卷、135頁

(38) 退溪学叢書編刊委員会『退溪全書』、ソウル、退溪学研究院、1989年、卷8、礼曹答日本国左武衛將軍源義清、第三冊、99-101頁

る⁽³⁹⁾。つまり、日本に対する警戒と懐柔の両面政策を引き続き取っていた。朝鮮王朝中興の名君と称される英祖は、蕩平策を実施し、実学派の形成に大きく貢献したにもかかわらず、従来の日本文化に対する軽視をあまり変えてはいなかった。当時の日本文化の発展と進歩を無視するのは、なお朝鮮知識人の主流であった。一方、柳得恭、李徳懋らを代表とする実学派の人物は、中国に対する意識だけではなく、日本文化に対する考え方も少しずつ変え始めていた。つまり、彼らは当時の中国と日本に対し、より現実的な認識を行っていた。したがって、十八世紀後半の朝鮮知識人の世界観は二つ分かれていた。『海槎日記』と『並世集』は、この対立する二つの観点を反映する書物である。しかし、日本本土に来て、江戸まで行った最後の通信使としては、日本文化に関する情報を収集するチャンスを失ったことは歴史的遺憾なことと言わざるを得ない。ある意味では、百余年以後、朝鮮の運命が大きく変わったことについて、この十八世紀の使行からも何らかの前兆を読み取れるだろう。

最後、柳得恭の『並世集』に収録されている他の日本知識人の漢詩を抄録しておく⁽⁴⁰⁾。

細合半斎

「題蒹葭堂雅集圖」

「千里郷為水 誰言景似吳 殷富家多少
風流客有無 只是春晨飲 何如契會圖
回舟傳好事 人尚在菰蘆」

「和元玄川浪華舟中見韻」

「縱不同舟去 曾推御李名 風波難再會
璧月得雙清 河渚蒹葭滿 暮雲杜宇鳴

龍門望縹渺 鼓棹指歸程」

岡田宜生 字挺之 号新川

「席止賦贈元玄川公」

「藉藉鷄林客 清名竟不虛 橐中齋筆硯
胸次貯詩書 野渡梅花發 閨門柳色疎
遠游償宿志 何用感居諸」

岡田惟周 字仲壬 号大壑 宜生弟

「奉別元玄川」

「奉使來修好 江山萬里餘 易催嘶馬感
難得換鵝書 祖帳桃花落 歸程柳葉舒
白雲隨處在 凝望意何如」

富野義胤 字仲達

「晚過興津」

「漁家鹽井傍青山 風定波平望亦閑
清見寺前田字浦 兩三舟趁暮鍾還」

注、清見寺在駿河巨鯨山、寺庭有老梅盤拿滿地。田字浦在富士川東、挾浦有松千萬株、海人燒鹽於此。

那波斯曾 字孝卿 号魯堂

「早行偶興」「自吉厚至藤枝早行途中偶作」

とも称す（那波斯曾の『東游篇』）

「淡頭布穀曉呼晴 蘋葉蘆芽綠復生
更有層鸞雲隱見 尋詩人向畫中行」

草安世 号天爵

「懷元玄川」

「春暮天涯思萬重 鳥啼花謝寂孤峰
愁心一夜寄明月 高照開門淡墨松」

注、赤馬開有淡墨松

源叔 字韶春

「奉送玄川元公」

「邀指星使霄漢間 承恩直出紫宸班
雲帆秋渡滄溟水 羽蓋春飄玉笥闕
萬里宦游生白髮 五更殘夢落青山

(39) 孫承詒「朝鮮後期実学思想の対外認識」、『朝鮮学報』、
第二百二十二輯、1987年1月、115-143頁
三宅英利・注(4)前掲論文

(40) 柳得恭『並世集』、巻2・『燕行録選集』本、647-648
頁

相逢欲問囊中草 別後飛揚不可攀」

岡明倫 号龜峰

「奉送玄川元公」

「使節催歸日 征帆去不停 思家幾勞夢
向国但占星 雲逐潮風黑 天圍鄉樹青
交歡猶未結 無那阻滄溟」

田吉記 字墨川

「送別玄川詞伯」

「雲色扶桑曉 雨沾漢使衣 正悲行路遙
更奈別魂飛 巨海寒帆影 千山藹夕暉
黯然相送日 但見雁群歸」